

國學院大學學術情報リポジトリ

Essay on Slovenian Literature : Ivan Cankar as an Example

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shishido, Setsutaro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000368

スロヴェニア文学事始

—イヴァン・ツァンカルを手掛かりに—

宍戸節太郎

1. ツァンカルと「一杯のコーヒー」

スロヴェニアの作家、イヴァン・ツァンカル (Ivan Cankar, 1876-1918) は、「文筆だけで生計を立てたスロヴェニアで最初の作家」⁽¹⁾である。日本では、「スロヴェニアの国語の教科書に頻繁に取り上げられ、ツァンカルの作品中スロヴェニア人にとって最もなじみ深い」⁽²⁾とされる掌編、「一杯のコーヒー」(‘Skodelica kave’, 1910) が、1979年に初めてセルビア・クロアチア語から訳され、紹介されている⁽³⁾。2006年には、ツァンカル、ウィーン時代の日々を髣髴とさせる短編、「お針子」(‘Šivilja’, 1902) が、ドイツ語から訳されている⁽⁴⁾。スロヴェニア語からは2008年に、前述「一杯のコーヒー」、また「ヨーロッパ諸国やアメリカなど国外で紹介されることの最も多いツァンカルの代表的作品」⁽⁵⁾、「使用人イェルネイと彼の正義」(‘Hlapec Jernej in njegova pravica’, 1907) が⁽⁶⁾、その後2011年に、長編小説『慈悲の聖母病棟』(“Hiša Marije Pomočnice”, 1904) が日本語に訳され、出版された。

スロヴェニア人に最もなじみ深いという、上述の「一杯のコーヒー」は、次のように始まる。

わたしは生涯のうち何度か愛する者にひどい仕打ちをした。そのような不正は聖霊に対する罪のようなもので、この世でもあの世でも許されることはない。消し去ることも忘れ去ることもできない。ときには心の中に姿が見えず、行方をくらまし、慌しい生活の中に身を潜めてしまったように、長い間動き出さずにいることもある。突然楽しいひとときの最中に、あるいは夜、悪い夢に怯えて目を覚ましたときに重苦しい記憶がよみがえり、たった今罪を犯したかのように激しく心を傷つけ焼き焦がす。ほかの記憶なら後悔や静かな物思いによってなだめることも簡単だが、このような記憶をやわらげることはできない。黒い染みとなって心に永遠に跡を残す⁽⁷⁾。

記憶はただし、そのままでは「永遠に跡を残す」ことはできない。個体としての「わたし」の消滅とともに、記憶もまたこの世から消え去ってしまう。語り手、「わたし」により想起された過ち＝「罪」の記憶は、「わたし」に書き留められ、記録、保存されて初めて、「永遠に跡を残す」ことを可能にする。

掌編「一杯のコーヒー」の記憶は、15年前にさかのぼる。郷里の実家に帰省した「わたし」は、そこで3週間を過ごす。

わたしはずっと憂鬱でふさぎこんでいた。わたしたちの住まいは寒々としていた。家族の誰もが湿った陰のような、重苦しい忌まわしいものを抱えているような気がした。(15頁)

1876年、ツェンカルは、オーストリア＝ハンガリー帝国、カルニオラ (Carniola)⁽⁸⁾ 州ヴルフニカ (Vrhnika) で、12人兄弟の8番目として生まれた。ヴルフニカは、州都リュブリャナ (Ljubljana) から西に30キロほど離れた、比較的大きな村だ。仕立職人だった父が早くに亡くなり、貧しさのなか、子供たちは母の女手一つで育てられる。学業に秀でたツェンカルは、それでも奨学金を得て州都リュブリャナの工学系の高等学校に進み、1896年秋には、ウィーン工科大学に入学する。ただし、在籍したのはわずか1学期間だけで、文学を志し、文筆で生計を立てるべく、すぐに大学をやめてしまう。翌1897年、苦労を重ねた母の死を看取るべく、いったん故郷のヴルフニカに帰るものの、ツェンカルは再びウィーンを目指し、1898年から1909年までの10年余りを、ウィーンで過ごした。「一杯のコーヒー」の「わたし」には、帝都ウィーンとヴルフニカを往来する、作家ツェンカルの姿が重なる。

郷里の実家で過ごす、最初の幾晩かを自分の部屋で過ごした「わたし」だが、夜中にときどき目を覚ますと、暗がりのなか、寢床から出てテーブルのそばに座る母の姿が目映る。

眠っているかのように、母はまったく安らかな様子だった。窓には覆いがかけられ外には月も星もなかったが、掌を額に押し当てた母の白い顔は輝いていた。わたしは耳をすました。すると聞こえてきたのは寢息ではなく、かろうじて押し殺したすすり泣きの声だった。(15頁)

頭から布団をかぶってみるものの、夢の中にまで母のすすり泣きが聞こえてくるようになる。「わたし」は、屋根裏の干草の中に新たなすみかを求め、「不機嫌で暗い不安な気持ちで初めての恋愛小説」(15頁)を書いている。語り手、「わたし」もまた作家である。

ある日「わたし」は、無性にブラックコーヒーが飲みたくなった。

どうしてそんなことを思いついたのかわからないが、とにかく飲みたかった。たぶん、家にはパンもなくコーヒーなどあるはずがないことを知っていたせいかもしれない。心がすっかりほかのものに向けられているとき、人は意地悪で残酷になる。母は目を見張りおずおずとわたしを見たが、何も答えなかった。(15頁以下)

「わたし」は再び暗い、不機嫌な気分で、何も言わずに屋根裏部屋へと戻る。

階段に静かな足音が聞こえた。母だった。ゆっくりと確かな足取りで、手には一杯のコーヒーを運んでいた。今わたしは思い出す、あの瞬間ほど母が美しかったことはなかった。ドア越しに真昼の光が斜めに差しこみ、まともに母の目を照らしていた。その目はいつもより大きくいつもより澄みわたり、あらゆる天上の光を、あらゆるこの世ならぬ優しさと愛をたたえていた。唇はうれしい贈り物を持ってきた子供のようにほほえんでいた。(16頁)

ところが、振り向いた「わたし」は意地悪な調子で、ただ、こう告げる。「邪魔をしないでくれ。……今はほしくないんだ」(16頁)。

母はまだ階段を上りきっておらず、母の腰から上だけが見えていた。わたしの言葉を耳にすると、母の動きが止まった。カップを持つ手だけが震えていた。母は怯えた顔でわたしを見つめ、目の中の光が消えていった。(16頁)

自分がしたことの重大さに気づき、恥ずかしさで頬を赤らめた「わたし」が、母に歩み寄って言う。「下さい、母さん」(18頁)。だが、母の目に光が戻ることはもはやなく、唇にほほえみが戻ることもない。

「一杯のコーヒー」の最後は、こう閉じられている。

三年か四年の後、外国で、ある女性がわたしの部屋にコーヒーを運んできた。その瞬間閃光がわたしの体を貫き、激しく心がうずき、苦痛のあまり叫び出したくなった。心は公正な裁判官で、細かな事情などあずかり知らぬものだから……(18頁)

細やかな心の機微に寄り添い、そっとそれを掬い上げ、母の言葉で表現した、スロヴェニア文学の傑作と言えよう⁽⁹⁾。

2. スロヴェニアのいま

嵐田浩吉が『スラヴの十字路』(2013年)にも書くように、「スロヴェニアは、スラヴ圏ばかりか、ヨーロッパの国々の中でも、日本人にとって最もなじみの薄い国のひとつかもしれない」⁽¹⁰⁾。スロヴェニアはバルカン半島の北西部に位置し、クロアチア、ハンガリー、オーストリア、イタリアと、周囲を大国に囲まれている。面積2万273平方キロメートル、日本の四国がよく引き合いに出される広さの国土に、約206万4千人(2016年1月)の人々が暮らしている⁽¹¹⁾。首都はリュブリャナ、人口約29万人(2016年)⁽¹²⁾。1991年6月25日、旧ユーゴからの独立を宣言して、翌1992年1月、当時のEC諸国が独立を承認、歴史上初めて、スロヴェニア人が自らの独立国家を形成した。スロヴェニアはそれまで、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、マケドニア、モンテネグロとともに、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国を構成する、6つの共和国の一つだった。

ただし、スロヴェニアは製造業を中心に、高度な先端技術を持つ、旧ユーゴ時代からの先進工業地域であり、連邦内の「最先進共和国」⁽¹³⁾だった。経済指標がすべてではないとはいえ、IMFのデータによれば、2011年の国別一人当たりのGDPは、2万4533ドルで世界30位。嵐田も指摘する通り、これはスラヴの国々の最上位であり、34位の韓国よりも上位に位置する⁽¹⁴⁾。2004年にNATOおよびEUに加盟し、2007年、最高額の紙幣にツェンカルの肖像が使われていた、トラル(Toral)を廃してユーロに参加。2008年上半期、旧社会主義国として初めてEU議長国を務めた。総じて、スロヴェニアは現在も、経済的堅調を維持している⁽¹⁵⁾。

身近なスポーツの世界での活躍もめざましい。

サッカーのJリーグでは、近年スロヴェニア人選手の活躍がよく話題にのぼる。Jリーグの外国籍選手で人数が多いのは、やはりブラジルと韓国だが、2016年はスロヴェニアがそれに次ぐ3位だった。数こそ5人と、ブラジル、韓国に比べて少ないものの、「今後は大きな勢力になる可能性を秘めている」⁽¹⁶⁾という。J1浦和レッズで活躍する、スロヴェニア出身のズラタン・リュビヤンキッチ(Zlatan Ljubijankić, 1983-)は、インタビューで、「国外でプレーする選手は、国境を接するイタリアに次いで日本が多い。人口から考えれば多いと思うし、日本との距離を考えても驚きだ」⁽¹⁷⁾、と答えている。

ズラタンは2012年に、フォワードとしてJ1大宮アルディージャに加入し、同じくスロヴェニア出身の監督、ズデンコ・ヴェルデニック(Zdenko Verdenik, 1949-)、フォワードのミリヴォイェ・ノヴァコヴィチ(Milivoje Novaković, 1979-)とともに、21戦連続無敗という、J1新記録樹立に貢献した。

スロヴェニアは、アルプス山脈南端に位置し、ウィンタースポーツも盛んだ。

北西部のジュリア・アルプスには、最高峰、標高2864メートルのトリグラウ (Triglav) 山がそびえ、スロヴェニアのシンボルとして、国章・国旗のデザインにも使われている。日本人にも人気のスキージャンプでは、たとえば2015/16年シーズン、男子ではペテル・プレウツ (Peter Prevc, 1992-) がワールドカップ個人総合優勝を果たし、女子もマヤ・ウティチ (Maja Vtič, 1988-) が、同じく総合3位に入っている。首都リュブリャナから南西には、ヨーロッパ最大のポストイナ (Postojna) 鍾乳洞、世界遺産シュコツィヤン (Škocjan) 鍾乳洞などのカルスト地形が広がり、さらに南西に進むと、アドリア海の海岸線に到達する。スロヴェニアは自然も豊かだ。

ウィンタースポーツファンにはなじみのエラン (Elan) 社もまた、スロヴェニアを代表するスポーツ用品メーカーである。1945年に創業し、社会主義体制、旧ユーゴの解体と、苦難の時代をくぐり抜けて、スロヴェニアが世界に誇るスポーツ・ブランドに成長した。エランは、ワールドカップ通算86勝の記録を持つ、スウェーデンのアルペンスキーヤー、インゲマル・ステンマルク (Jan Ingemar Stenmark, 1956-) の活躍とともに、スキーシーンには、欠かせない地位を確立した⁽¹⁸⁾。

目下、ワールドカップ総合優勝記録を重ねる、日本の高梨沙羅 (1996-) が使用するスキー板も、スロヴェニアのメーカー、スラットナー (Slatnar) 社のものだ。スラットナーは1971年、スロヴェニアで創業し、当初は自動車部品や航空機部品などを製造していた。2005年からスキー板を靴に取り付ける締め具、ビンディングの開発と製造を手掛け、今では、ワールドカップ競技者の約8割が、スラットナーのスキービンディングを使用しているという⁽¹⁹⁾。2016年、ジャンプ用のスキー板製造事業がエラン社からスラットナー社に移管され、高梨のほか上述のプレウツの活躍も、スラットナーが支えている⁽²⁰⁾。

3. 母たちの言葉の承認

スロヴェニアの歴史は、6世紀後半、サヴァ (Sava) 川上流およびその周辺地域に定住した、スラヴ人の歴史とともに始まる。とはいえ、アジア系のアヴァール (Avar) 王国、ゲルマン系のフランク (Frank) 王国と、異民族による長い支配が続かなか、G・カステランとA・ベルナル 『スロヴェニア』 (千田善訳、2000年) によれば、スロヴェニア人は、自分たちのアイデンティティーを、「かろうじて、言語つまりスロヴェニア語を使うことによって」⁽²¹⁾、保持した。小泉淳二も、ツァンカル論 (2001年) の中で、「国家をもたない民族にとって拠りどころとなるものは、なによりもまず言語であろう。自由と独立を求める民族運動は、必然的に言語をめぐる闘争に結びつく」⁽²²⁾、と述べている。

スロヴェニア語で書かれた最古の文献は、『ブリジンスキ・スポメニキ (フラ

イジング文書』 (“Brizinski spomeniki”) と呼ばれる写本で、972年から1039年のあいだに、キリスト教の伝道を目的に書かれている。1803年、ミュンヘン近郊のフライジング (Freising) 司教座の図書室で発見され、「告解Ⅰ」、「罪と懺悔についての説教」、「告解Ⅱ」の、3つの文書から構成される。文字は、ラテン文字で書かれている。キリスト教はすでに8世紀中頃にはスロヴェニアにもたらされており⁽²³⁾、金指久美子は、「スロヴェニア語概説」(2001年)のなかで、この文書が実際に書かれたのは9世紀であろうと推定している⁽²⁴⁾。1282年、スロヴェニアはハプスブルク家の所領となり、以後1918年まで、600年以上にわたってハプスブルク帝国領となるものの、その後の中世の写本でも、スロヴェニア語で文書は書かれ続けている。

スロヴェニア人の民族としての意識は、宗教改革の時代に、スロヴェニア語とともに形となって現れた。

1517年ドイツで、マルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) が、教皇庁による免罪符の発行を批判した「95か条の提題」により、教皇から破門された。ルターの思想は、スロヴェニア人の土地にも急速に広がり、1520年代の終わりまでには、トリエステとグラーツ、リュブリャナで、ルター派のコミュニティーが活動を始めている⁽²⁵⁾。ツァンカルが、「スロヴェニアの宗教改革を指導した中心人物、スロヴェニア文語の創造者にしてスロヴェニア文学の始祖」⁽²⁶⁾と呼んだ、スロヴェニア人司祭プリモシュ・トルバル (Primož Trubar, 1508-86) は、トリエステでプロテスタントに改宗している。トルバルはカトリック勢力からの迫害を免れるべく、ドイツへ逃れることになるが、その地でトルバルは、当時の最先端技術である印刷・出版技術を使って、スロヴェニア人に向けた書物による宗教教育に取り組む⁽²⁷⁾。時代の最新ツールを用いた、通信教育である。

1550年、トルバルはスロヴェニア人のために、『教理問答集』 (“Catechismus in der Windischen Sprach”) をスロヴェニア語に訳し、スロヴェニア語の基本的な文法書『初等読本』 (“Abecedarium”) を出版した。これらが史上初めてスロヴェニア語で書かれ、出版された書物である。1582年には、トルバルにより、新約聖書のすべてがスロヴェニア語で読むことが可能になる。20世紀初頭、トルバル生誕400年を記念する講演 (1908年) のなかで、ツァンカルはトルバルを引きながら、述べている。

1582年、トルバルは新約聖書の全訳を出版しました。その前書きには次のように記されています。「40年前 (最初の書籍は1550年)、我々のスロヴェニア語で書かれた文書、まして書籍などは存在しませんでした。なぜなら人々はこう思っていたのでしたから。スロヴェニア人やハンガリー人の言語は粗雑で野蛮であって、それらは書くことも読むこともできない、と」。そのあとスロヴェニア語によるプロテスタント文学が、めざましい発展を遂げた様子

が語られ、このように続けられます。「これらの書物は学校で授業が行われる都市ばかりでなく、村々においても、教皇の禁止に逆らって、むさぼるように、歓呼をもって農民や子供たちに読まれるでしょう。彼らは書物から多くを学び、頑迷なカトリック教徒を前に、自分たちの教えに自分たち自身で責任を持ち、それらを守る術を手に入れるのです」⁽²⁸⁾。

トルバルの業績は彼の弟子たちの手に引き継がれ、とりわけ1584年には、ユリ・ダルマティン (Jurij Dalmatin, 1547-1589) が、旧約を含めた聖書の完訳を完成、出版している。ルターの翻訳により、聖書のすべてがドイツ語で読めるようになったのが1534年、それから50年後のことだった。同じ1584年には、アダム・ボホリッチ (Adam Bohorič, 1520-1600) による、スロヴェニア語初の文法書、『冬の余暇』 (“Articae horulae succisivae”) も出版されている。

20世紀も終わりを迎える1991年、スロヴェニアはようやく、政治的に完全な独立国家となった。スロヴェニア語は、史上初めて国家の公用語となった。フランス、ナポレオン (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) 統治下の19世紀にも一度、民族語による教育、新聞発行などにより、諸民族の民族意識育成が図られ、スロヴェニア語がスロヴェニア人の居住地域で公用語とされた時代があった。スロヴェニア人の民族意識は大いに刺激され、民族としての自覚が促される⁽²⁹⁾。この時期、イェルネイ・コピタル (Jernej Bartolomej Kopitar, 1780-1844) が、スロヴェニア語の最初の近代的な文法書、『クライン、ケルンテン、シュタイアーマルクにおけるスラヴ語の文法』 (“Grammatik der slavischen Sprache in Krain, Kärnten und Steyermark”, 1808-1809) を出版している。だが、フランス民法を導入したナポレオンによる統治は長く続かず、1809年から1813年までのわずか4年で終わりを告げる。スロヴェニア語が独立国家の公用語となるには、はるか20世紀末を待たなければならない。

1985年、ソビエト社会主義共和国連邦でミハイル・ゴルバチョフ (Mikhail Sergeevich Gorbachev, 1931-) が共産党書記長に就任し、ペレストロイカ (Perestroika) = 再構築・改革が、東欧諸国に波及していく。スロヴェニアもまた独立へと歩みを進めるなか、自分たちの言語に対する承認要求圧力が、これまでになく高まる。

1987年2月、リベラル派とカトリック系を中心とする反体制的知識人のグループが、雑誌『ノヴァ・レヴィヤ (新評論)』 (“Nova revija”) 上に、スロヴェニアの民族綱領を発表する。彼らは、「政治的複数主義 [一党制廃止のこと] や民主主義、市場経済制度の導入、そして、ユーゴスラヴィアを国家連合に改組し、そのなかでスロヴェニアの独立を実現すること」⁽³⁰⁾ を、要求していた。柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』 (1996年) によれば、『ノヴァ・レヴィヤ』には他にも、「ユーゴにおいてスロヴェニア語がセルビア・クロアチア語と比べて二級の言語と見な

されていること、スロヴェニア人の民族自決権を拡大する必要があること」⁽³¹⁾、などが主張されていた。

リュブリャナとベオグラード (Beograd) の緊張が高まる。1988年5月、青年層に広く読まれ、スロヴェニアで人気を誇っていた雑誌、『ムラディナ (青年)』 (“Mladina”) の編集者らが、軍事機密漏洩の容疑で逮捕されるという事件が起こった。逮捕者のなかには、独立後国防相、首相を歴任することになる⁽³²⁾、ヤネス・ヤンシャ (Janez Janša, 1958-) も含まれていた。ヤンシャは、かねてから連邦人民軍に批判的な、反体制派の論客だった。同じ年7月、早々に裁判が行われる。スロヴェニアの首都リュブリャナで開かれた裁判だというのに、軍事法廷で使用された言語は、スロヴェニア語ではなく連邦人民軍の公用語、セルビア・クロアチア語だった。忍耐強いスロヴェニア人にも、我慢の限界だった。この裁判をきっかけに刺激された、スロヴェニア人の反連邦、反セルビア感情がその後終息を見ることはなく、スロヴェニアは独立へと向かって、大きく歩みを進めることになった⁽³³⁾。

スロヴェニアの独立に端を発し、その後かつてのユーゴスラヴィア各地で繰り広げられた戦禍と、いまも残る惨状を忘れることはできないだろう。しかし、19世紀に「自らが由来を持つ民族の言葉」⁽³⁴⁾で詩作を続けた、フランツェ・プレシェレン (France Prešeren, 1800-1849)、またツァンカルに代表されるように、スロヴェニア人の歴史は、母たちの言葉、スロヴェニア語の承認を求める、長くて遠い道のりだった。言語は文化の基底であり、言語を保持することは、言語が内包する文化的特性を保持することに他ならない。「スロヴェニア民族とスロヴェニア文化」(1907年)と題した講演のなかで、ツァンカルは述べている。

民族の解放の戦いは文化の戦いである — そしてこの戦いを誹謗中傷し、不純な目的をなすりつけようとする者は民族の敵であり、文化の敵である⁽³⁵⁾。

EUを支える、重要な加盟国となったスロヴェニアの人々にとって、いまやツァンカルの言う戦いは、政治的な意味では、ようやくその役割を終えようとしている。

註

- (1) 佐々木とも子、イヴァン・ゴドレル「解説 — イヴァン・ツァンカルと『慈悲の聖母病棟』」(イヴァン・ツァンカル『慈悲の聖母病棟』(佐々木とも子、イヴァン・ゴドレル訳、成文社、2011年) 185~205頁所収) 187頁、※4。
- (2) イヴァン・ゴドレル、佐々木とも子「前書き—イヴァン・ツァンカルの人と作品」(イヴァン・ゴドレル、佐々木とも子訳、イヴァン・ツァンカル『イヴァン・ツァンカル作品選』(イヴァン・ゴドレル、佐々木とも子訳、成文社、2008年) 7~10頁所収) 8頁。
- (3) イヴァン・ツァンカル「一杯のコーヒー」(柴宜弘訳、蔵原惟人監修『世界短編名作選 東

欧編』（新日本出版社、1979年）119～123頁所収）。

- (4) イヴァン・ツァンカル「お針子」（小泉淳二訳、茨城大学独文学論集編集委員会『茨城大学独文学論集』第2号、2006年、1～16頁）。
- (5) イヴァン・ゴドレール、佐々木とも子「前書き——イヴァン・ツァンカルの人と作品」8頁。
- (6) イヴァン・ツァンカル「一杯のコーヒー」（イヴァン・ゴドレール、佐々木とも子訳、イヴァン・ツァンカル『イヴァン・ツァンカル作品選』11～18頁所収）。

イヴァン・ツァンカル「使用人イェルネイと彼の正義」（イヴァン・ゴドレール、佐々木とも子訳、同掲書19～172頁所収）。

- (7) イヴァン・ツァンカル「一杯のコーヒー」（イヴァン・ゴドレール、佐々木とも子訳）13頁。「一杯のコーヒー」からの引用は、以下これによるものとし、本文中に頁数を付記して引用する。

ツァンカルの作品の多くは、インターネット上でもスロヴェニア語原語で公開されており（三田順「解題 イヴァン・ツァンカルとその時代——世紀転換期ハプスブルク帝国における一スラヴ民族の作家として」（一橋大学大学院言語社会研究科紀要編集委員会『言語社会』第1号、2007年、273～276頁）275頁）、「一杯のコーヒー」は、下記アドレスでも閲覧可能である。https://sl.wikisource.org/wiki/Skodelica_kave（2017年9月14日最終閲覧）

なお、次のドイツ語訳も参照した。Ivan Cankar: Ein Schälchen Kaffee. (Übersetzung von Hans Thurn) In: Unvergänglicher Sommer. Eine Anthologie. Hamburg (Agentur des rauhen Hauses) 1966. S. 168-174.

- (8) カルニオラはラテン語・イタリア語名。ドイツ語名クライン（Krain）、スロヴェニア語名は克蘭スカ（Kranjska）。
- (9) 日本でツァンカルを論じた議論としては、前掲、三田順「解題 イヴァン・ツァンカルとその時代——世紀転換期ハプスブルク帝国における一スラヴ民族の作家として」のほか、次のものがある。

小泉淳二「スロヴェニアからオーストリアへ：ツァンカルの作品集について」（茨城大学独文学論集編集委員会『茨城大学独文学論集』第1号、2001年、51～69頁）

カーティア・シュトゥルム＝シュナーブル「イヴァン・ツァンカルにおける社会参加（アングジューマン）と象徴主義的表現様式：あるヨーロッパ＝スロヴェニア人作家から見た世紀転換期ウィーン」（三田順訳、一橋大学大学院言語社会研究科紀要編集委員会『言語社会』第1号、2007年、265～273頁）

トーネ・スモレイ「スロヴェニア文学におけるウィーン像」（三田順訳、北里大学一般教育部『北里大学一般教育紀要』第21号、2016年、85～100頁）

三田順「解題「スロヴェニア文学と中欧の首都ウィーン」（北里大学一般教育部『北里大学一般教育紀要』第21号、2016年、101～102頁）

三田によれば、「現在は隣国であるとはいえ、スロヴェニア文学研究はオーストリアでも盛んであるとはいえ、スロヴェニアの位置すら正確に知らない一般人も少なくない」（三田順「解題 イヴァン・ツァンカルとその時代——世紀転換期ハプスブルク帝国における一スラヴ民族の作家として」274頁）という。また、「スロヴェニア語学習者の少なさゆえに英語を始めとした外国語への翻訳も極めて少なく、ツァンカル自身ウィーンと深く結びついていたものの、その作品は数点を除いてこれまでほとんどドイツ語に翻訳されていなかった」（同掲、274頁）。

しかしながら、1994年から、クラゲンフルト（Klagenfurt）、スロヴェニア語名ツェロヴェツ（Celovec）にあるドラヴァ出版社が、エルヴィン・ケストラー（Erwin Köstler）によるドイツ語訳の出版を続けており、これまで計15巻におよぶツァンカル作品が刊行さ

れている。

Ivan Cankar: *Vor dem Ziel. Literarische Skizzen aus Wien*. Aus dem Slowenischen und mit einem Vorwort von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1994.

Ivan Cankar: *Pavličeks Krone. Literarische Skizzen aus Wien*. Aus dem Slowenischen übersetzt und mit einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1995.

Ivan Cankar: *Das Haus der Barmherzigkeit. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1996.

Ivan Cankar: *Aus fremdem Leben. Erzählungen und Novellen*. Aus dem Slowenischen übersetzt und mit einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1997.

Ivan Cankar: *Traumbilder*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1998.

Ivan Cankar: *Nina · Kurent. Zwei Erzählungen*. Aus dem Slowenischen übersetzt von Erwin Köstler und Kristina Kallert. Mit Anmerkungen und einem Nachwort von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1999.

Ivan Cankar: *Materialien & Texte*. Zusammengestellt und aus dem Slowenischen übersetzt von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2000.

Ivan Cankar: *Knechte. Dramatische Werke*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2001.

Ivan Cankar: *Der Sünder Lenart. Zwei autobiographische Erzählungen*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2002.

Ivan Cankar: *Frau Judit. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2003.

Ivan Cankar: *Die Fremden. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2004.

Ivan Cankar: *Martin Kačur. Lebensbeschreibung eines Idealisten. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2006.

Ivan Cankar: *Am Hang. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2007.

Ivan Cankar: *Weißer Chrysantheme. Kritische und politische Schriften*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2008.

Ivan Cankar: *Milan und Milena. Erzählungen*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2011.

オーストリアにとどまらず、広くドイツ語圏全体におけるツェンカル受容については、また稿をあらためたい。

- (10) 嵐田浩吉『スラヴの十字路』（里文出版、2013年）132頁。
- (11) 在スロベニア日本国大使館ホームページ。http://www.si.emb-japan.go.jp/website_jp/index_j.html（2017年9月14日最終閲覧）
- (12) 同上。
- (13) 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』（岩波書店、1996年）147頁。
- (14) 嵐田浩吉、132頁。
- (15) 小山洋司「第30章 経済——残る経済危機の傷跡」（柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著『スロヴェニアを知るための60章』（明石書店、2017年）179～183頁所収）、石田信一「第31章 EUの中のスロヴェニア——旧ユーゴの優等生として」（同掲書184～187頁所収）参照。
- (16) 上條憲也「スロベニア選手 存在感」（『東京新聞』、2016年5月1日）。
- (17) 同上。
- (18) 嵐田浩吉、135頁以下参照。
- (19) 「スラットナー・アジア」ホームページ参照。http://slatnar.asia/（2017年9月14日最終閲覧）
- (20) 「「スラットナー」のアジア展開」（在スロベニア日本国大使館『スロベニア マンスリー』、2017年3月7日（在スロベニア日本国大使館ホームページ））参照。
- (21) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル『スロヴェニア』（千田善訳、白水社、2000年）21頁。
- (22) 小泉淳二「スロヴェニアからオーストリアへ：ツァーンカルの作品集について」58頁。
- (23) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、21頁。
- (24) 金指久美子「スロヴェニア語概説」（金指久美子『スロヴェニア語入門』（大学書林、2001年）174～195頁所収）177頁。
- (25) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、25頁以下。
- (26) Ivan Cankar: Trubar und die Trubar-Feiern. In: Ders.: *Weißer Chrysantheme*. S. 247-267. S. 247.
- (27) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、42頁。
- (28) Ivan Cankar: Trubar und die Trubar-Feiern. S. 257f.
- (29) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、30頁以下、材木和雄「南スラヴ統一国家構想の起源と展開——1917年「コルフ宣言」に至る過程（広島大学平和科学研究センター『広島平和科学』第25号、2003年、145～188頁）175頁、註7参照。
- (30) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、90頁。
- (31) 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』148頁。
- (32) 石田信一「第29章 政治——小党分立による連立政権」（柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著『スロヴェニアを知るための60章』174～178頁所収）参照。
- (33) 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』148頁以下、ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、91頁、山崎信一「第11章 社会主義ユーゴスラヴィア時代——ユーゴスラヴィアの先進地域」（柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著『スロヴェニアを知るための60章』73～76頁所収）76頁、および鈴木健太「第12章 独立への過程と「十日間戦争」——ユーゴスラヴィアからスロヴェニアへ」（同掲書77～82頁所収）78頁以下参照。
- (34) Ivan Cankar: [Über die slowenische Literatur]. In: Ders.: *Weißer Chrysantheme*. S. 83-97. S. 87.
- (35) Ivan Cankar: Das slowenische Volk und die slowenische Kultur. In: Ders.: *Weißer Chrysantheme*. S. 202-236. S. 236.